

1240年パリでのタルムード裁判 —序論、その経緯について—

尾崎 秀夫

はじめに

1240年、教皇の命令に従ってフランス王ルイ9世治下のパリでタルムードなどの文献がユダヤ人から没収され、裁判が開催された後、その焼却が行われた。タルムードとは、ユダヤ教の口伝律法を成文化したものである。ユダヤ教では、モーセはシナイ山で神から2つの律法を授かるとされる。成文律法と口伝律法である*1。

成文律法とは聖書、キリスト教のいう旧約聖書のことである。口伝律法はその名の通り、口承で伝えられたが、紀元後2～5世紀に賢者、書記と呼ばれる人々によって成文化された。これがタルムードである。成文化された場所によりパレスチナ・タルムードとバビロニア・タルムードがあるが、一般にタルムードというとバビロニア・タルムードを指す。

タルムードはミシュナーとゲマラから成る。ミシュナーとは律法の条文であり、ゲマラとはその注釈である。聖書をはるかにしのぐほど膨大であり、ユダヤ人にとって生活の指針であり、智慧の貯蔵庫、教育課程の中心、そして宗教的指導の鍵であった*2。

その焼却はユダヤ人に大きなショックと悲しみを与えた。当時学生としてパリにいた、ラ

ビ・ローテンブルクのメイルは宇宙が崩壊するような感覚を覚えた、という*3。

この事件もキリスト教によるユダヤ人迫害のひとつと通常捉えられ、一方的に教会によるユダヤ教攻撃とされている。権力を強めた教会によるユダヤ教への不当な介入、迫害と見られるのである*4。

19世紀にこの論争を取り上げたロエブは、この討論をユダヤ人、とりわけラビ・ユダヤ教に対する攻撃としている*5。ジェレミ・コーエンも1982年の『托鉢修道士とユダヤ人』で、托鉢修道会の出現で教会によるユダヤ攻撃が開始され、タルムードが突然攻撃目標となったとする*6。1994年にパリとトロワで開催された国際学術会議の成果である『パリでのタルムード焼却：1242-1244』の序文で、編者のジルベール・ダアンはこれを13世紀におけるユダヤ人の状況悪化におけるキリスト教のユダヤ人締め付けの一環としている*7。

*3 Robert Chazan, *op. cit.*, pp.80, 189-190.

*4 Judah M. Rosenthal, *The Talmud on Trial: The Disputation at Paris in the Year 1240*, in *The Jewish Quarterly Review* 47(1956); Joel E. Rembaum, *The Talmud and the Popes: Reflections on the Talmud Trials of the 1240s*, *Viator* 13(1982).

*5 Isidor Loeb, *La controverse de 1240 sur le Talmud*, *Revue des études juives* (=La controverse) 2(1882), p.247.

*6 Jeremy Cohen, *The Friars and the Jews: the Evolution of Medieval Anti-Judaism*, Ithaca, 1982, pp.52, 60.

*7 ed. Gilbert Dahan, *Le brûlement du Talmud à Paris 1242-1244*, Cerf, 1997 (= *Le brûlement*), p.7.

*1 マック・ディモント『ユダヤ人の歴史』(平野和子・河合一充訳)、ミルトス、1994年、156～169頁。

*2 *Extractiones de Talmud per ordinem sequentialem*, ed. U. Cecini, *Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis*, Brepols, 2018 (= *Extractiones*), pp.VII-XX; Robert Chazan, *The Trial of the Talmud: Paris, 1240*, *Pontifical Institute of Mediaeval Studies*, 2012, p.2.

我が国では詳細な研究はないが、滝川義人氏は『ユダヤを知る事典』でタルムード焼却を暴挙としている*8。黒川知文氏は『ユダヤ人迫害史』のなかで、このような討論をユダヤ人迫害正当化の手段としている*9。池上俊一氏も『中世幻想世界への招待』で、教皇はタルムードを「異端」の書物で、教会の理解する旧約聖書の道徳律からかけ離れたものと考え、当時のユダヤ人の反社会的行動の源泉と見て、その没収・焼却を命じたとする*10。

タルムードの没収・焼却がとりわけ北フランスのユダヤ人にとって大きな打撃であったことは否定できない*11。それが教会の暴挙ということも認めざるを得ない。しかし、この事件を一方的にキリスト教側からのユダヤ教弾圧と見てよいものであろうか。それは教会による反ユダヤ主義政策の延長線で起こったのか？民衆の反ユダヤ感情が嵩じたためか。西欧中世のユダヤ人は全く無力で、教会のなすがままであったのであろうか。

この事件を教会の一方的な介入と見るのではなく、ユダヤ人の積極的にかわりにも目を向けねばならないのではないだろうか。そうすることによって中世西欧におけるキリスト教徒・ユダヤ人関係に新たな光を当てることができる。本稿は、その前提として、まずタルムード裁判と焼却の経緯を明らかにすることを目的とする。

1. タルムード裁判が始まるまで

1238/9年にユダヤ教からの改宗者であるニコラ・ドナンが教皇グレゴリウス9世に35箇条

のタルムード批判を提出した*12。ニコラ・ドナンについてはこの問題に関する情報以外、ほとんど何もない。彼は、ユダヤ人は彼らが成文律法と呼ぶ(旧約)聖書を蔑ろにし、神が口頭でモーセに与え、後に書き記されたとするタルムードを重視、それは今や聖書の分量をはるかに超えており、またキリスト教徒を攻撃するよう勸奨し、イエスやマリアについて冒瀆的な言葉が書かれている、と訴えた。

1239年6月9日、教皇グレゴリウス9世はパリ司教オーヴェルニュのギョームに書簡を送る*13。書簡はこの問題を提起した「愛する息子」であるニコラ・ドナンにこの書簡を託された。それは、ユダヤ人の書物(タルムード)の問題を指摘しているが、ここではユダヤ人の書物の問題とするだけで、まだそれに対する対処は指示されていない。

同日、フランスの大司教たちにも書簡を送

*12 Loeb, *La controverse* 2(1881), pp.252-270; 3(1882), pp.39-55; Alexander Fidora and Ulisse Cecini, *Nicholas Donin's Thirty-Five Articles Against the Talmud; A Case of Collaborative Translation in Jewish-Christian Polemic*, in: *Ex Oriente Lux. Translating Words, Scripts and Styles in Medieval Mediterranean Society*, ed. by Charles Burnett and Pedro Mantas, Cordoba, 2016, pp.187-191.

*13 Loeb, *La controverse* 1(1880), p.247; Shlomo Simonsohn, *The Apostolic See and the Jews, Documents: 492-1404*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1988 (= *Documents*), I, p.171, no.162; Shlomo Simonsohn, *The Apostolic See and the Jews, History*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1991, p.300; Grayzel, *The Church and the Jews in the XIIIth Century*, vol.1, Philadelphia, 1933, p.238; Rosenthal, *op. cit.*, pp.70-1; Cohen, *op. cit.*, p.62.

*8 滝川義人『ユダヤを知る事典』、東京堂出版、1994年、54頁。

*9 黒川知文『ユダヤ人迫害史—繁栄と迫害とメシア運動—』、教文館、1997年、127頁。

*10 池上俊一『中世幻想世界への招待』、河出書房新社、2012年、268～9頁。

*11 Rembaum, *op. cit.*, p.203.

り、問題を明らかにし、対処法を指示している。問題は、ユダヤ人が成文律法（旧約聖書）以外に口伝の律法がモーセに与えられたと主張し、それは後に書き記されてタルムードと呼ばれるようになり、成文律法よりも大部で、それには読むに堪えない誤謬やキリスト教に対する侮辱が含まれ、彼らのキリスト教改宗を妨げている。それゆえ必要なら世俗権力の助けを借りてでも来年の四旬節にそれを没収し、托鉢修道士に引き渡すよう命じるのである*14。

さらに 6 月 20 日、ヨーロッパの君主に書簡を送り、タルムードこそユダヤ人が改宗しない原因であると確認し、翌年の四旬節にユダヤ人が所有する書物を没収し、托鉢修道会に引き渡すよう求めた*15。また同日パリ司教とドミニコ会修道院長、フランチェスコ会総長に書簡を送り、タルムードをユダヤ人の頑固の原因とし、それを没収し、それに訴え通り誤謬が見いだされなら、焼却するよう命じている*16。

すなわち、グレゴリウスは次のように主張するのである。ユダヤ人は、モーセが成文律法以外に口伝律法を神から授かり、それは後に賢者とか書記とか呼ばれる人々によって忘れ去られないようタルムードとして書き記されたと主張する、そこには馬鹿げた主張や誤った有害な教え、キリスト教に対する言語道断な虚偽と侮辱が含まれる、ユダヤ人は成文律法を軽視し、タルムードを尊重する、タルムードは成文律法よりも分量が多い。したがって、まずタルムードを没収して調査し、もし彼の非難が正しいなら、それらを焼却するように、と。

こうしてヨーロッパ中の君主と高位聖職者にタルムードの没収、調査、焼却の命令が出され

たが、これに従った君主はフランス王ルイ 9 世だけであった。王の命令で 1240 年 3 月 3 日、パリでユダヤ人の書物が没収され、托鉢修道士に引き渡された。こうして 6 月末にパリの王宮でタルムード裁判が開催されることになる*17。

2. タルムード裁判の開始

1240 年のパリでのタルムード裁判に関する史料は決して少なくない。キリスト教徒、ユダヤ人の双方が書いた史料が伝わっている。キリスト教徒が書いたものとしては、「ヴィヴォ師（ラビ・イエヒエル）とユダ師（ムランのダヴィッド）の宣誓供述書」があり、これはタルムードについて証言したユダヤ人の 2 人のラビの「告白」である。これらは比較的短いもので、速記録ではないが、裁判に立ち会った者によるラビの証言の解釈を記したもの、ユダヤ人の主張を否定的に示そうとしたものと思われる*18。

*17 裁判開始の日付については多くの歴史家が 6 月 25 日を採用している。Rosenthal, *op. cit.*, p.71; Solomon Grayzel, *The Church and the Jews in the XIIIth Century*, vol.1, Philadelphia, 1933, p.30; Rebecca Rist, *Popes and Jews, 1095-1291*, Oxford, 2016, pp.48-51; Piero Capelli, Nicolas Donin, *The Talmud Trial of 1240, and the Struggles Between Church and State in Medieval Europe*, in: *Entangled Histories*, ed. by Elisheva Baumgarten, Ruth Mazo Karras, and Katelyn Mesler, Philadelphia, 2017, p.159; 黒川、前掲書、127 頁。しかし、テュイリエトル・ゴフは 6 月 12 日としている。André Tuillier, *La condamnation du Talmud par les maîtres universitaires parisiens, ses causes et ses conséquences politiques et idéologiques*, in: *Le brûlement*, p. 63. ジャック・ル・ゴフ『聖王ルイ』（岡崎敦・堀田郷弘・森本英夫訳）、新評論、2001 年、1015 頁。

*18 Chazan, *op. cit.*, pp.17. 47.

*14 Simonsohn, *Documents, Documents*, I, p.172, no.163; Grayzel, *op. cit.*, p.240.

*15 Simonsohn, *Documents., Documents*, I, p.173, no.164; Grayzel, *op. cit.*, p.242.

*16 Simonsohn, *Documents., Documents*, I, p.174, no.165; Grayzel, *op. cit.*, p.250.

ヘブライ語の史料は、タルムードについて証言したパリのラビ・イエヒエルの「弁論 *Vikuah*」とされるものである。これもその場で書かれた速記録ではなく、数年後、遅くとも 1268 年までに^{*19}、おそらくオフィツィエル家のラビ・ヨセフ・ベン・ナタンが書いたと思われる。彼はラビ・イエヒエルの弟子で、激しい反キリスト教文書を書いたことで知られている。この「弁論」でも、冷静に客観的に記述したというより、尊敬する師が邪悪な背教者ニコラ・ドナンに勝ったことを伝え、状況を劇的に描こうとした、と思われる^{*20}。タルムード批判はパリ以外でも起こりえた。ユダヤ人は当然それに対処せねばならなかった。これはキリスト教徒のタルムード批判の内容、それに対する対処法の重要な資料となる^{*21}。

なお、「弁論」は 3 つの版で伝わっており、それらの関係についてはガリンスキやラガチらの研究があるが、詳細についてはここでは触れない^{*22}。本稿では、パリ写本を基礎として出版されたヘブライ語版のジョン・フリードマンによる英訳を参照した^{*23}。

*19 Rosenthal, *op. cit.*, pp.72-3, no.53; Chazan, *op. cit.*, pp.16-21.

*20 Rosenthal, *op. cit.*, p.74.

*21 Chazan, *op. cit.*, pp.56-57.

*22 Galinsky, The Different Hebrew Versions of the "Talmud Trial," of 1240 in Paris, in: *New Perspectives on Jewish-Christian Relations*, in Honor of David Berger, ed. by Elisheva Carlebach and Jacob J. Schacter, Brill, 2012, pp. 109-140; Ursula Ragacs, Paris 1240: Further Pieces of the Puzzle, in: Alexander Fidora and Görg K. Hasselhoff (eds.), *The Talmud in Dispute During the High Middle Ages*, Universitat Autònoma de Barcelona Servei de Publicacions, Bellaterra, 2019, pp.9-25.

*23 Chazan, *op. cit.*, pp.126-168.

キリスト教徒とユダヤ人の双方のものがあ
り、両方の立場からの証言を聞くことができ
るとはいえ、それぞれはどちらかの立場に立っ
ているので利用には注意を要する。これらの史料
はいずれも公式の裁判記録ではないため、審理
の経過を正確にたどることはできない。パリで
のタルムード裁判で実際に議論された内容があ
る程度伝えられていると思われる^{*24}。

裁判に出席したのは、キリスト教側はまず、
皇太后ブランシュ・ド・カステイーユ、それに
サンス大司教ゴーティエ、パリ司教オーベルニ
ユのギョーム、国王聖堂付司祭ジョフロワ・
ド・ベルヴェル、サンリス司教アダム・ド・シ
ャンブリ、パリ大学総長ウード・ド・シャトー
ルーであった。ウードは 1244 年にトゥスクル
ム司教枢機卿、教皇特使となり、1248 年には
国王ルイの十字軍に参加し聖地に赴いた。ま
た、ラビ・イエヒエルの「弁論」ではニコラ・
ドナンが検事のような役割を果たしている。

ユダヤ人から次の 4 人が召喚された。その 4
人とは、ラビ・イエヒエルの「告白」の序文に
よると、パリのラビ・イエヒエル、ムランのジ
ュダ・ベン・ダヴィド、シャトー・ティエリの
サムエル・ベン・ソロモン、クーシのモーセで
ある。ユダヤ人の出席者 4 名は、別々に隔離さ
れた^{*25}。

まず、ラビ・イエヒエルが 6 月 25 日月曜日
と 26 日火曜日に、ラビ・ユダ・ベン・ダヴィ
ドは 27 日水曜日に尋問された。他の 2 人の尋
問については史料がない。裁判がどれくらい続
いたかも分からない^{*26}。

この裁判はどのような形で行われたのか。ラ
ビ・イエヒエルの「告白」ではニコラ・ドナン
が検事のように告発し、ラビがそれに答える形
で描かれている。しかし、歴史家の中にはこの

*24 *Ibid.*, p.21; Rosenthal, *op. cit.*, p.73.

*25 Chazan, *op. cit.*, p.128.

*26 Grayzel, *op. cit.*, p.30; Rosenthal, *op. cit.*,
p.71; Cohen, *op. cit.*, p.63.

裁判は異端審問の手續きに従っており、異端審問の規則では被告は原告を相まみえることはなかったの、この2人が裁判で相対したことはないと考える者もある^{*27}。しかし、ウィリアム・ジョーダンは、異端審問制度は1240年にはまだできたばかりで手續きも定まっておらず、2人が相対したこともありうるという^{*28}。ローゼンタールも、異端審問では被告と原告は対面しないことを認めながらも、両者はこの裁判で相対したと主張している^{*29}。

これについては明確な証拠はないが、筆者はこの2人の議論はあったのではないかと考える。ユダヤ教のラビと議論できるキリスト教徒は当時いなかったであろう。タルムードはまだほとんど知られていなかった。おそらくこの問題をきっかけにラテン語訳が、ユダヤ教からの改宗者によって始められたところであった。1240年のタルムード裁判にも出席したワード・ド・シャトールーが改宗者であるティボア・ド・セザンヌらに命じてラテン語に翻訳、編集させた『タルムード抜粋 *Extractiones*』が作成されたのはおそらくパリ裁判後の1244年か5年ごろである^{*30}。したがって、ニコラ・ドナンをおいてラビと対峙できる人物はいなかったのではないだろうか。

*27 Hyam Maccoby, *Judaism on Trial, Jewish-Christian Disputations in the Middle Ages*, Oxford, 1982, p.23.

*28 William Chester Jordan, *The French Monarchy and the Jews*, University of Pennsylvania Press, 1989, p.137

*29 Rosenthal, *op. cit.*, p.73. カベツリもニコラ・ドナンとラビ・イエヒエルの間で討論が行われたとする。Capelli, *op. cit.*, p.166.

*30 Rosenthal, *op. cit.*, pp.74-5. 『タルムード抜粋』は最近、校訂版が出版された。ed. U.Cecini, *Extractiones*, Brepols, 2018(note.2); Loeb, *La controverse 1*(1880), p.249.

裁判が行われた場所は多くの歴史家がパリの王宮としているが、テュイリエはコルドリエ修道院あるいはジャコバン修道院とする^{*31}。

こうしてタルムード裁判が始まった。ではその裁判ではどのような議論が行われたのであろうか。

3. 裁判での議論

裁判の経緯は完全には明らかになっておらず、時間を追って語ることはできないが、大体どのようなことが論じられたかを史料からまとめてみよう。いくつかの非難とその反論について簡潔に紹介したい。ただし、キリスト教徒、ユダヤ人双方が残した史料があるとはいえ、圧倒的に詳細なのはユダヤ人の史料なので、以下の叙述はヘブライ語史料に主に依拠したものとならざるを得ない。

まず、6月25日にラビ・イエヒエルが審問を受けた。彼は宣誓を求められ、これを拒否した。このことはヘブライ語史料の「弁論」に詳しく述べられているとともに^{*32}、ラテン語史料の「ヴィヴォ師の宣誓供述書」にも簡単にはあるが記されている^{*33}。ラビ・イエヒエルは、ユダヤ人宣誓を決しておろそかにしないが、今はその必要がないとして断固としては拒否、結局皇太后ブランシュがこれを受け入れた。

ニコラ・ドナンは、タルムードの古さを問題にする。彼はタルムードが4世紀以上前に書かれたと主張するが、これに対してラビ・イエヒエルは1500年以上前であると答える。この問題は「弁論」のみに現れる。ラビ・イエヒエルはヒエロニムス(c.347-420)らキリスト教の聖職者がタルムードを知っており、それを批判せず、今日まで放置してきたのであるから、キリ

*31 Rosenthal, *op. cit.*, p.71; Chazan, *op. cit.*, p.49; Tuillier, *op. cit.*, p.63.

*32 Chazan, *op. cit.*, p.133.

*33 *Ibid.*, p.122.

スト教に害はないと主張する^{*34}。さらに聖書に注釈が必要であることはキリスト教も認めており、ニコラ・ドナンはモーセの律法の一切の解釈を否定するので 15 年前に異端として破門したと言う。ラビ・イエヒエルはここでニコラ・ドナンの主張はキリスト教の主張とも異なることを指摘しているのである。

タルムードは神によって授けられたものではないとする批判、タルムードの神的起源の批判に対し、ラビ・イエヒエルはどう答えたのか。この批判は 35 か条の告発の最初に掲げられており^{*35}、教皇グレゴリウス 9 世もタルムードの没収を命じる書簡で述べている^{*36}。ラビ・イエヒエルはこれに直接反論するのではなく、口伝律法、タルムードの必要性を主張する議論を組み立てる^{*37}。

成文律法には多くの矛盾がある。神が矛盾のない成文律法を書くことができることに議論の余地はない。ではなぜ神は矛盾を残したのかは、人知の及ぶところではない。そのような矛盾はタルムードという伝承がなければ理解できず、ラビたちによって解釈され、人々に教えられねばならない。また神は成文律法でいくつかの法を省略されたり、簡潔に書きすぎて人間に

とって理解が難しいこともあった。そのようなときにもラビが正しく解釈して人々を導かねばならない。「申命記」に「問題があまりにも難しくあなたが決められないなら、彼らがあなたにすべきことを告げる^{*38}」と書かれているとおりである。成文律法を正しく理解し、生活において実践するにはタルムードとラビによる正しい解釈が必要不可欠なのである。

またドナンは、タルムードを書き記した賢者が成文律法の言葉を破棄することができることとタルムードが認めていることを指摘する。賢者は預言者よりも優れていると主張しているのである。これに対してラビ・イエヒエルは、完全に、永遠に破棄できるのではなく、必要なときに一時的にできるということであるとする。それはローマ教皇が王のために近親結婚を許すことがあり、それによって教皇が法を変更したとは言われたいと同じである^{*39}。

タルムードは荒唐無稽な、馬鹿げた話が頻出すると非難される。35 箇条の告発にも認められる。これは以前からよく知られたタルムード批判であった^{*40}。例えば月と神の間答などである^{*41}。これに対し、ラビ・イエヒエルは次のように答える。まず、タルムードにはハラハーとハガダーが含まれる。ハラハーとは法律であり、ハガダーとは思索的記述である。ハラハーについてはすべてが受け入れられるが、ハガダーについては想像力豊かな記述であるので、必ずしもすべてを受け入れる必要はない。ハガダーも真実ではあるが、正しい解釈が必要である。実際、想像力豊かな記述は旧約聖書の中にも多く見いだされる。「(バラムの) ロバの演説 (民数記 22:22-35)、塩の柱となったロトの妻 (創世記 19:23-26)、星が軌道から外れて戦

*34 裁判に参加したワード・ド・シャトールーは後の教皇インノケンティウス 4 世への書簡で、ヒエロニムスがタルムードを批判していると述べている。Grayzel, *op. cit.*, p.278; Chazan, *op. cit.*, p.100; Rembaum, *op. cit.*, p.219. もっとも中世初期においてタルムードはキリスト教徒にほとんど知られていなかった。Chazan, *op. cit.*, pp.4-5. 12 世紀以前のキリスト教世界のタルムード認識については別稿を期したい。

*35 Loeb, *La controverse* 2 (1882), pp.253-254; Chazan, *op. cit.*, pp.102-103.

*36 Simonsohn, *Documents*, I, p.172, no.163; Grayzel, *op. cit.*, p.240.

*37 Chazan, *op. cit.*, pp.60-61, 131-132.

*38 *Ibid.*, pp.61, 132. 「申命記」第 17 章 8-13 節。

*39 Chazan, *op. cit.*, p.161.

*40 *Ibid.*, p.56.

*41 *Ibid.*, pp.63-34, pp.154-155.

ったシセラの戦い、(士師記 5:20)、一夜にして生じ、一夜にして滅びるヨナのとうごま(ヨナ書 4:10)」などである。したがって、タルムードのこのような記述を荒唐無稽と否定するならば、旧約聖書の同様の話をも否定することになるのである^{*42}。

タルムードはキリスト教徒に対して攻撃的で、そのような行為を奨励しており、35 か条の告発では「最良のキリスト教徒を殺せ」、「サバトを守るキリスト教徒、律法を研究するキリスト教徒を死刑に処すべし」、「キリスト教徒を騙しても罪にならない」などと書かれていると指摘される^{*43}。このような非難の背景には、血の中傷や儀礼的少年殺害などユダヤ人が罪のないキリスト教徒を密かに殺害しているという噂があったことであろう。35 箇条の告発では「キリスト教徒」となっているが、タルムードでは「異教徒 *goyim*」となっている。

これに対しラビ・イエヒエルは、タルムードではたしかに「戦争ではあなたは異教徒の最良の者を殺すべきである」と書かれているが、「殺せ」というのはあくまで戦時のことである、と主張する。さらに戦時であってもまずは和平が目指される。「申命記」第 20 章 10 節に「あなたが攻撃する町に近づいたとき、あなたは和平の条件を提示せよ」と書かれている。最初から殺してはならないのである。ユダヤ人がその中で暮らしている人々に対しても、彼らの身体や財産に害をなしてはならない^{*44}。またタルムードには次のようにも書かれている。ユダヤ人は貧しい異教徒を貧しいユダヤ人同様に助けねばならない、異教徒に丁寧にあいさつせねばならない、異教徒の病人も見舞わねばならない、異教徒の死者をも葬らねばならない、など

など。

さらに、「異教徒 *goyim*」は決してキリスト教徒を含まない、とする^{*45}。それは多神教徒のことであり、律法を受け入れているキリスト教徒は含まれない。タルムードで「異教徒の祭日前の 3 日間、彼らとの取引は禁じられ」ているが、多くのユダヤ人が祭日にもキリスト教徒と取引している。ユダヤ人はキリスト教徒に律法について教えており、ユダヤ教の書物が読めるキリスト教徒の聖職者がいるのは、両者の良好な関係を示している。

タルムードは聖母マリアとイエスに対する甚だしい冒瀆が記されている、と非難される^{*46}。これは「ラビ・イエヒエルの弁論」にも、2 つのラテン語の「告白」にも現れる非難である^{*47}。タルムードによると、イエスは煮えたぎる糞尿に浸かっているとされる^{*48}。これはキリスト教徒が神として崇める者についてのひどい冒瀆である。

ラビ・イエヒエルはタルムードの中にこの 1 節があることを認めるが、イエスに対する冒瀆という非難には反論する。そこで言われているイエスはキリスト教徒が崇めるイエスではない。この箇所のイエスは、ラビの解釈を認めず、成文律法だけを受け入れた異端者である別のイエスである。それに対し、キリスト教のイエスはイスラエルを迷わせ、自分自身を神とし、律法の根幹を否定したのであり、かの異端者よりはるかに悪い別人である、と言うのである。ラテン語史料によると、ラビ・イエヒエルはこのイエスは皇帝ティトゥスの時代に生きた

*42 Chazan, *op. cit.*, pp.59-60, 130-131.

*43 *Ibid.*, pp.146-151.これらは 35 箇条の告発でも記されている。Loeb, *La controverse* 2(1881), pp.263-267.

*44 Chazan, *op. cit.*, pp.149-150.

*45 *Ibid.*, *op. cit.*, p.151.

*46 *Ibid.*, pp.65-70.

*47 Loeb, *La controverse* 3(1882), p.48.

*48 P・シェーフアー『タルムードの中のイエス』(上村静香・三浦望訳)、岩波書店、2010年、129頁。

と主張したとされている*49。

ドナンはさらに続けて、別の箇所では、石殺しに処せられた「ナザレのイエス」が魔術を行い、人々を迷わせたと記されていることを指摘する。ここでは「ナザレのイエス」と書かれていて、キリスト教のイエスとは別人とは言いにくい。ラビ・イェヒエルはこれについてはイエスを殺したのは、1世紀のエルサレムのユダヤ人指導者であり、そこに存在しなかった現在のユダヤ人には罪はない。またイエスが魔術を行い、人々を迷わせた者としたのも当時のユダヤ人であり、後世のユダヤ人の見解ではない、このことについてキリスト教徒はユダヤ人を非難できないのである。

もう1箇所、イエスが言及されていると思われる箇所が指摘される。ラビ・ヨシュア・ベン・ペライアとその弟子であるイエスの物語である。ヨシュアはある宿屋で歓待されたのだが、その宿屋の女主人のことをイエスが悪し様に言ったので、激怒し、彼を破門した。イエスは何度も破門の解除を求めたが、受け入れられなかった。しかしヨシュアも気が変わり、受け入れようとしてイエスに手招きをしたが、イエスはそれを誤解してまた拒否されたと思い、煉瓦を積んでそれを崇拜した。これは偶像崇拜をしたと受け取られる*50。ヨシュアは彼に償いをせよと迫ったが、イエスは聞く耳を持たなかった。ヨシュアは「ナザレのイエスは魔術を行い、惑わし、そしてイスラエルを道から逸らした」と言った*51。

ラビ・イェヒエルはこれに答えて、偶像崇拜をし、魔術を行い、人々を惑わし、イスラエル

に道を踏み外させたこのイエスもキリスト教のイエスではないと主張する。この話は、テキストにも「ヤンナイ王がラビたちを殺したとき」とあるように、ヤンナイ*52の時代のことである。ヤンナイとは紀元前103年から紀元前76年までイスラエルを統治したハスモン朝の王である。従ってラビ・イェヒエルは、このナザレのイエスもキリスト教のイエスとはまったくの別人であるとする。

マリアに対する冒瀆も指摘される*53。タルムードには、ロッドのスタダの息子が過ぎ越の祭りの前日に吊された、とある。この息子はイエスのことと考えられる。その母であるスタダの夫はパ波斯・ベン・ユダ、同居人はパンディラとされる。そして吊るされた者は「パンディラの息子」とも呼ばれている。さらに彼の母は髪結いのミリアムであるとも書かれている。このミリアムは自分の夫に背を向け、そのためにソターsotahと呼ばれたとされる。

スタダとミリアムはどのような関係なのだろうか。シェーフアーによると、ラヴ・ヒスダという3世紀後半のラビは次のように解釈しているという。ミリアムが本名で、スタダはあだ名である。スタダは「正しい道から逸れる」、「不忠実になる」といった意味を含む。ミリアムはソターと呼ばれたとあるが、ソターは姦通を疑われたということである。

すなわち、イエスはふしだらなミリアム＝マリアの、パンディラという愛人との間でできた不義の子とされるのである。

これをマリアに対する冒瀆と受け取った列席の司教たちは激怒したという。しかし、ラビ・イェヒエルはこれはイエスやマリアと何の関係もないと言って反論する。まずキリスト教のイ

*49 Loeb, *La controverse* 3(1882), pp.55, 57.

皇帝ティトゥスはウェスパシアヌス帝の子で、ドミティアヌス帝の兄、79年から81年まで在位した。

*50 Maccoby, *op. cit.*, p.26.

*51 Chazan, *op. cit.*, p.138. シェーフアー、前掲書、51～52頁。

*52 ヤンナイについては、フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌4』（秦剛平訳、ちくま学芸文庫）、2000年、213～237頁。

*53 Chazan, *op. cit.*, pp.136-137. シェーフアー、前掲書、23頁。

イエスはエルサレムで処刑されたが、ここではロッドでとされている。マリアの婚約者はヨハネであり、パポス・ベン・イエフダではない。なぜかラビ・イエヒエルはマリアの婚約者ヨゼフをヨハネと誤認している。髪結いのミリアムはタルムードの別のところにも現れ、そこではラヴ・パパとアバヤの時代に死んだとされ、それはキリスト教のイエスより 400 年後である。

列席者たちが多くのイエスがいたことに納得できないと主張した時、ラビ・イエヒエルは「フランスで生まれたすべてのルイがフランス王であるわけではない」と反論する。彼によると、タルムードでキリスト教のイエスに言及されているのは、「石殺しとなったナザレのイエス」だけであり、ここでの短い言及をのぞいてイエスはまったく言及されていないのである^{*54}。ラテン語でその「告白」が伝えられているムランのダヴィッドも、タルムードに書かれているイエスとキリスト教のイエスを別人としている^{*55}。

このように、ラビ・イエヒエルはタルムードがイエスやマリアを冒瀆しているという非難に反論する。そして皇太后が口をはさみ、イエスが糞尿の中に投げ込まれたという受け入れがたいことをラビ・イエヒエルが否定しようとしているのに、なぜニコラ・ドナンらキリスト教側の出席者はそれを認めさせようとするのかと問いかけることによって、この議論は終わりを告げた^{*56}。

ラビ・イエヒエルの「弁論」では、王太后ブランシュ・ド・カステューユが裁判で 2 度発言し、最初はラビ・イエヒエルの宣誓を免除し、2 度目はイエスを冒瀆する箇所についての議論を終わらせる役割を果たしているが、反ユダヤ主義的であった彼女がなぜかラビ・イエヒエル

に助け舟を出すような発言をしている^{*57}。

さて、タルムードに現れるイエスをキリスト教のイエスとは別人とする主張はこの裁判において効果的であったのだろうか。

糞尿に投げ入れられたイエスをキリスト教のイエスとは別人と主張する場面で、このイエスは単なる異端者であるの対し、キリスト教のイエスはイスラエルを迷わせ、自分を神と主張し、律法の根幹を揺るがしたとしてさらに悪いと主張する。糞尿に投げ込まれたイエスとキリスト教のイエスを別人と主張するために、キリスト教のイエスを貶めているのである。それではさらに罪深いキリスト教のイエスはどのような罰を受けることになるのか。裁判の場ということを考えれば、このような主張は裁判官の心証を害し、不利に働くであろうことをラビ・イエヒエルが気づかないわけではないであろう。これはユダヤ人だけに読まれる文書として書かれた内容ではないだろうか。

また、ナザレのイエスの石殺しの箇所について言えば、ラビ・イエヒエルはこれは当時のユダヤ人の罪であり、キリスト教徒はこれについてラビ・イエヒエルの時代のユダヤ人を非難できないと主張しているが、ここで問題となっているのはタルムードでイエスについてどのように書かれているかであり、ラビ・イエヒエルの時代のユダヤ人が罪に問われるかどうかではない。従って彼の反論はタルムードの弁護には有効とはいえないであろう。

ラテン語史料では、ラビ・イエヒエルのタルムードのイエスをキリスト教のイエスとは別人とする主張について、「彼が嘘をついているのは明らかである」と書き加えられている^{*58}。ユダヤ人にとっては彼の弁明は正々堂々たる見事な主張であったであろうが、列席したキリスト教徒の高位聖職者の心には響かなかったようで

*54 Chazan, *op. cit.*, pp.139-140.

*55 Loeb, *La controverse* 3(1882), pp.56-57.

*56 *Ibid.*, *op. cit.*, p.140.

*57 Jordan, *op. cit.*, p.137; Maccoby, *op. cit.*, p.22.

*58 Loeb, *La controverse* 3(1882), pp.55, 57.

ある。

また、タルムードに現れるほとんどのイエスをキリスト教のイエスとは別人とするラビ・イエヒエルの主張は、ユダヤ教のラビたちの共通理解ではない^{*59}。11世紀のラビで、タルムードの解釈で後世に大きな影響を与えてシュロモ・イツハーキー、通称ラシも彼の後にタルムードの注釈を書いたトサフィストと呼ばれる人々も、タルムードに言及されているイエスをすべてキリスト教のイエスとしている。1260年に行われたバルセロナ討論^{*60}にユダヤ人として出席したナフマニデスも、この討論ではタルムードは問題でなかったこともあり、キリスト教のイエスがヨシュア・ベン・ペライアの弟子であったことを承認している。現代においてもタルムードのイエスはキリスト教のイエスと認められている^{*61}。従って、このような主張はラビ・イエヒエルらの確信からの主張というより、この裁判を切り抜けるための方便と考えるべきかもしれない。

この裁判での判決は明確ではないが、裁判の数年後にパリの広場で荷車 24 台分のユダヤ教の文献が焼却された^{*62}。その後教皇インノケンティウス 4 世は 1247 年に、グレゴリウス 9 世の立場を修正し、タルムードがユダヤ人の生活に不可欠であることを認め、容認できる部分はユダヤ人に返還するよう命じた^{*63}。これは、裁

判に参加した枢機卿ウード・ド・シャトールーの強い反発を招くことになる^{*64}。その後の経緯については今後の課題としたい。

あとがき

1240 年にパリでタルムード裁判が行われた。この裁判は中世西ヨーロッパでのキリスト教徒とユダヤ人の関係を考えるうえで極めて重要なものである。しかし、とりわけ日本では、その概要さえ明らかにされていないように思われる。本稿は、この裁判を検討する最初の一步として書かれたものである。

ニコラ・ドナンというユダヤ教からキリスト教への改宗者が、教皇グレゴリウス 9 世にタルムードの問題を提起し、教皇はこの調査を各国の王や高位聖職者に命じる。フランス王ルイ 9 世だけがこれに応え、1240 年にパリでタルムード裁判が開催される。そこではキリスト教の高位聖職者が裁判官となり、問題を提起したニコラ・ドナンが検察を務め、ユダヤ教の 4 人のラビがタルムード擁護の主張を繰り広げた。残念ながら、比較的詳しく伝わっているのはそのうちの 1 人、ラビ・イエヒエルの弁論のみである。それは必ずしもこの裁判での彼の主張を正確に伝えてはいないと思われるが、この裁判でどのようなタルムード批判が取り上げられたのか、それらに対してユダヤ人がどのような反論を準備していたかを知る貴重な資料ではあるだろう。裁判自体はおそらく出来レースであり、没収されたタルムードは裁判の後に焼却されることになる。

本稿では、1240 年パリで行われたタルムード裁判の経緯をまとめた。今後、この時期にタルムードが問題となり、裁判が行われた理由、この裁判の意義、その後のタルムード批判など、13 世紀のタルムードにかかわる問題を探っていきたい。

*59 Maccoby, *op. cit.*, pp.29-30.

*60 1260 年のバルセロナ討論についての邦語文献としては、志田雅宏「ナフマニデスのメシアニズム」『宗教研究』86 号、2012 年、27～52 頁。片山寛「ナフマニデスとバルセロナ討論」『西南学院大学神学論集』1 号、2017 年、1～17 頁。

*61 シェーファー、前掲書。

*62 Rosenthal, *op. cit.*, p.72; Graizel, *op. cit.*, p.32.

*63 Simonsohn, *Documents*, I, pp.196-197, no.187; Grayzel, *op. cit.*, p.274.

*64 Grayzel, *op. cit.*, pp.275-279.